2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第9回　スキュレとカリュブディス（第9挿話）
2020年12月6日（日）@オンライン

【読書会参加に当たってのお願い】

・13:00から13:25まではZoom操作の練習時間とします。13:30から開始します。
・画面のスクリーン・ショット撮影について
・第一部の録音・録画について
・スライド中で柳瀬尚紀訳『ユリシーズ』（河出書房新社）を引用するにあたっては、「U-Y 挿話番号.ページ数」で表記します。「鼎訳」は丸谷才一らによる集英社訳を指します。

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

Image: National Library of Ireland（c.1904), National Library of Ireland on The Commons

2022年の『ユリシーズ』 第9回 スキュレとカリュブディス（第9挿話）
2020年12月6日（日）@オンライン

- 13:00-13:30 …… 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 …… ご挨拶：読書会に際してのお願い
- 13:40-14:40 …… 第1部：主催者発表（小林・南谷）
- 14:40-15:20 …… 休憩＋アンケート回答
- 15:20-16:10 …… 第2部：グループディスカッション
- 16:10-16:30 …… 休憩
- 16:30-17:30 …… 第3部：フロアディスカッション
- 17:30-17:40 …… ご挨拶・第10回読書会について
- 17:40-19:30 …… 懇親会＋Wandering Books

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

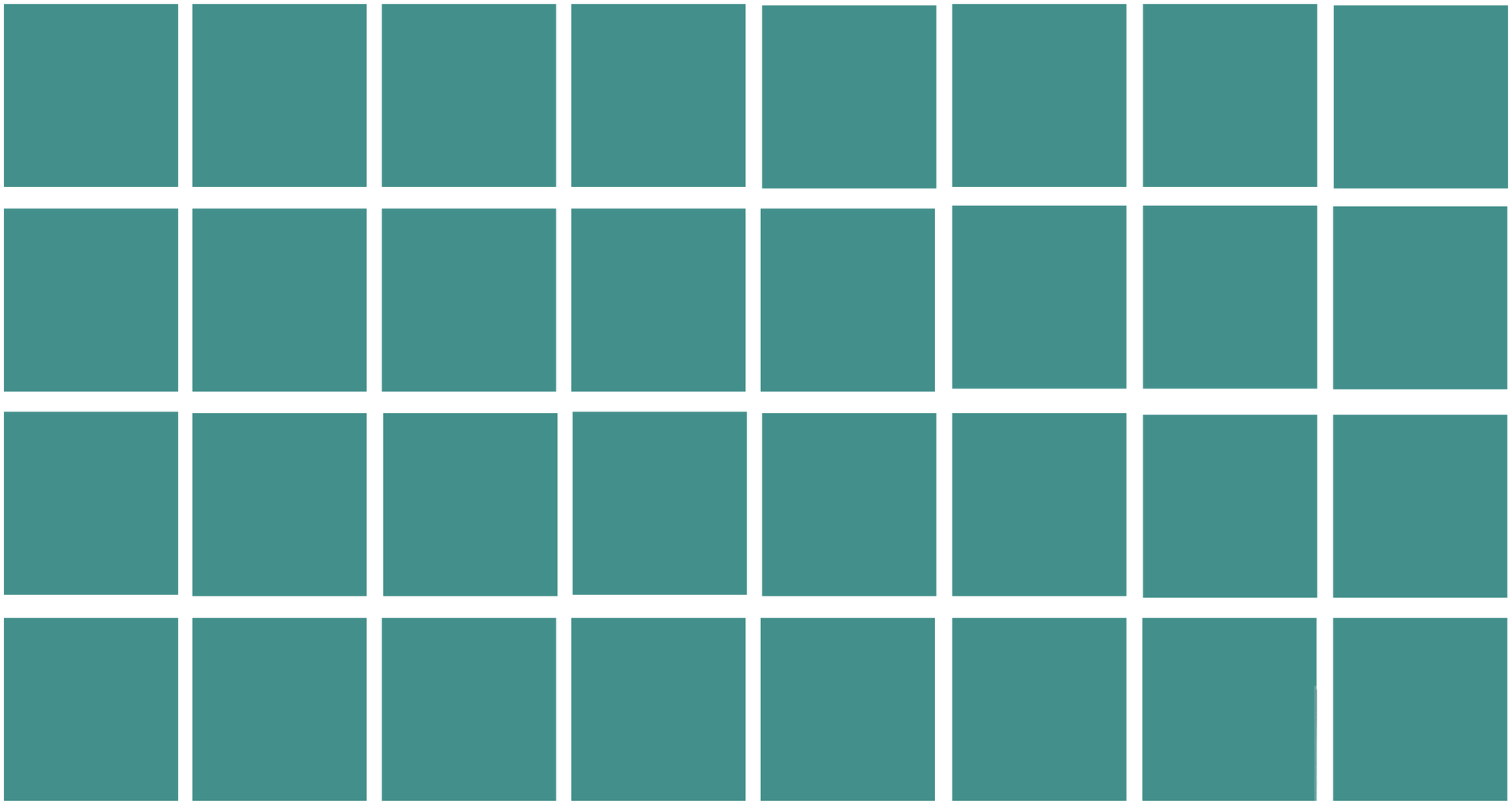
Image: National Library of Ireland (c.1904), National Library of Ireland on The Commons

2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第9回 スキュレとカリュブディス (2020.12.26)

第1回 2019年6月16日	第4挿話　カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話　テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話　ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話　プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話　食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
特別回 2020年4月26日	特別回　第1挿話～第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2020年6月28日	第6挿話　ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年8月23日	第7挿話　アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年10月25日	第8挿話　ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年12月6日	第9挿話　スキュレとカリュブディス	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2021年2月21日	第10挿話　さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年4月	第11挿話　セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年6月	第12挿話　キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年8月	第13挿話　ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年10月	第14挿話　太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年12月	第15挿話　キルケ	Book III. Nostos	
第16回 2022年2月	第16挿話　エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年4月	第17挿話　イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年6月16日	第18挿話　ペネロペイア	Book III. Nostos	

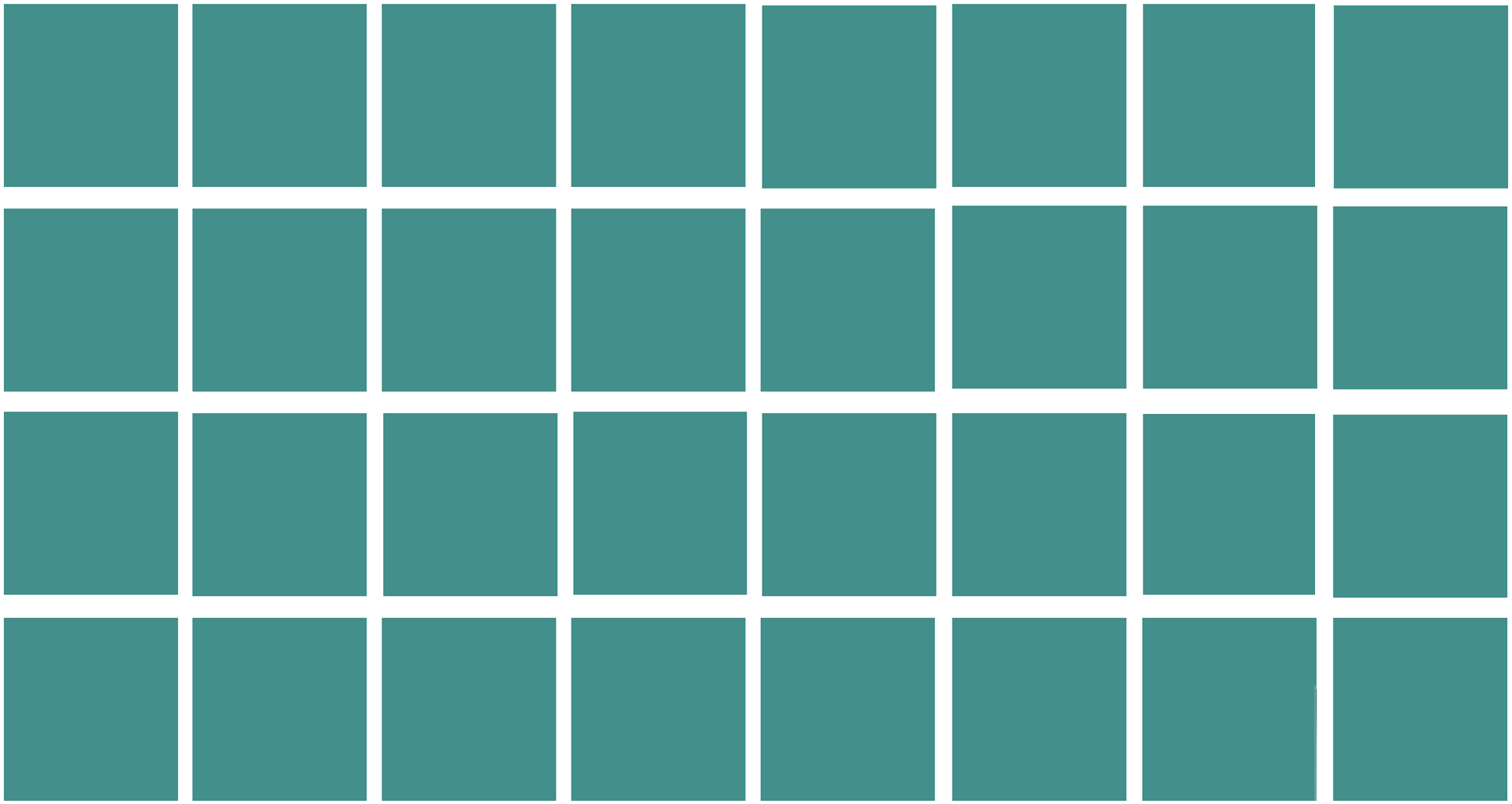
STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

Episode 1: Telemachus



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石鹸の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に…”（U-Y 1. 11）

Episode 2: Nestor



“—さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “—タレントゥムです。”
“よろしい。それで？” “—戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2. 49)

Episode 3: Proteus

海	波	砂	貝	風	浜	潮	浜
馬	犬	女	男	馬	鴎	鳩	神
目	耳	靴	足	口	歯	臍	洟
死	産	詩	韻	巴	触	汚	溺

“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る”（U-Y 3. 73）

Episode 4: Calypso

猫	肉	食	臓	糞	便	紙	読
牛	乳	血	環	尻	肥	秘	隠
朝	鐘	金	猶	緩	庭	夫	妻
陽	絵	会	魂	出	鍵	失	閨

“リアポウルド・ブルーム氏は禽獣の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓….”（U-Y 1. 11）

Episode 5: Lotus Eaters

郵	喪	花	茶	東	屍	温	浮
酔	香	水	植	歩	帽	光	沈
紙	聖	性	馬	猫	薬	歌	浴
式	棒	車	喫	煙	石	賭	体

“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は粛々と歩いた。ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亜麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる…”（U-Y 5. 127）

Episode 6: Hades

肉	血	骨	土	体	臓	心	爪
牛	馬	蹄	犬	鼠	蛆	花	草
屠	回	揺	埋	腐	解	交	流
列	噂	車	父	食	黒	帽	雨

“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギッーと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった…”（U-Y 6. 155）

Episode 7: Aeolus

風	機	音	輪	山	詩	煙	教
電	話	止	転	塔	種	弁	学
肺	騒	馬	車	回	鍵	逆	空
心	血	鉄	樽	像	交	字	?

“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そうして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き…”（U-Y 7. 203）

Episode 8: Lestrygonians

食	吐	歯	臭	鼻	業	環	水
視	盲	口	痛	血	蝿	輪	流
飢	鴎	疫	牛	肉	交	唇	穴
触	臓	汚	屠	骨	想	時	門

“パイナップル氷砂糖、レモン棒飴、バター飴玉。粗目糖顔の娘がクリスチャン・ブラザーズの男にせっせとクリームボンボンを掬っている。小学校のお楽しみ会だろか。ぽんぽんによくないよ。…”（U-Y 8. 261）

Episode 9: Scylla and Charybdis

門	談	光	魂	震	鷹	墜	巴
間	論	神	知	霊	鳧	S	己
聞	語	幕	戯	劇	父	子	牛
問	説	床	翁	狂	讐	志	遺

“慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。
—それにウィルヘルム・マイスターのあの貴重な一節もあるわけだから。偉大な詩人が偉大な同胞詩人を論じている。逡巡する魂が、葛藤する疑念に引裂かれつつ、苦難の海に立ち向かう。”（U-Y 9. 315）

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- 第9挿話の独特の読みにくさ

・ *in medias res* ではじまる　→ “Urbane, to comfort them, the quaker librarian purred” (U9. 1)（慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。）
・ 意味内容を輪郭づける素材が挿話の「外」にある。
・ 分断される／並走するナラティブと、噛み合っていない対話問答
・ 遊戯的な言語実験（ex. ネウマ譜、戯曲のト書形式、執拗な押韻…）
・ 古代哲学から現代文学までの、広大な知の参照枠
・ スティーヴンという人物の自閉的な内面（＝ブルームのように柔らかい知性ではなく、「簡単に分かられてたまるか」という若さゆえの堅固さ）
・ “Ulysses”という言葉がでてくるなど、やたらに自己言及的な記述がある。
・ そもそも誰が語っているかわからない…

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- → “Urbane, to comfort them, the quaker librarian purred”（U9. 1）（慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。）

  - Urbaneという形容詞がなぜ文頭にあるの？癖のある語り手？
  - comfortということは、これより前に、ひと悶着あった？
  - themって誰？
  - “the”って言われても…
  - なんで “purred”なんていう動詞を使うの？
  - この語順の意味がわからない。

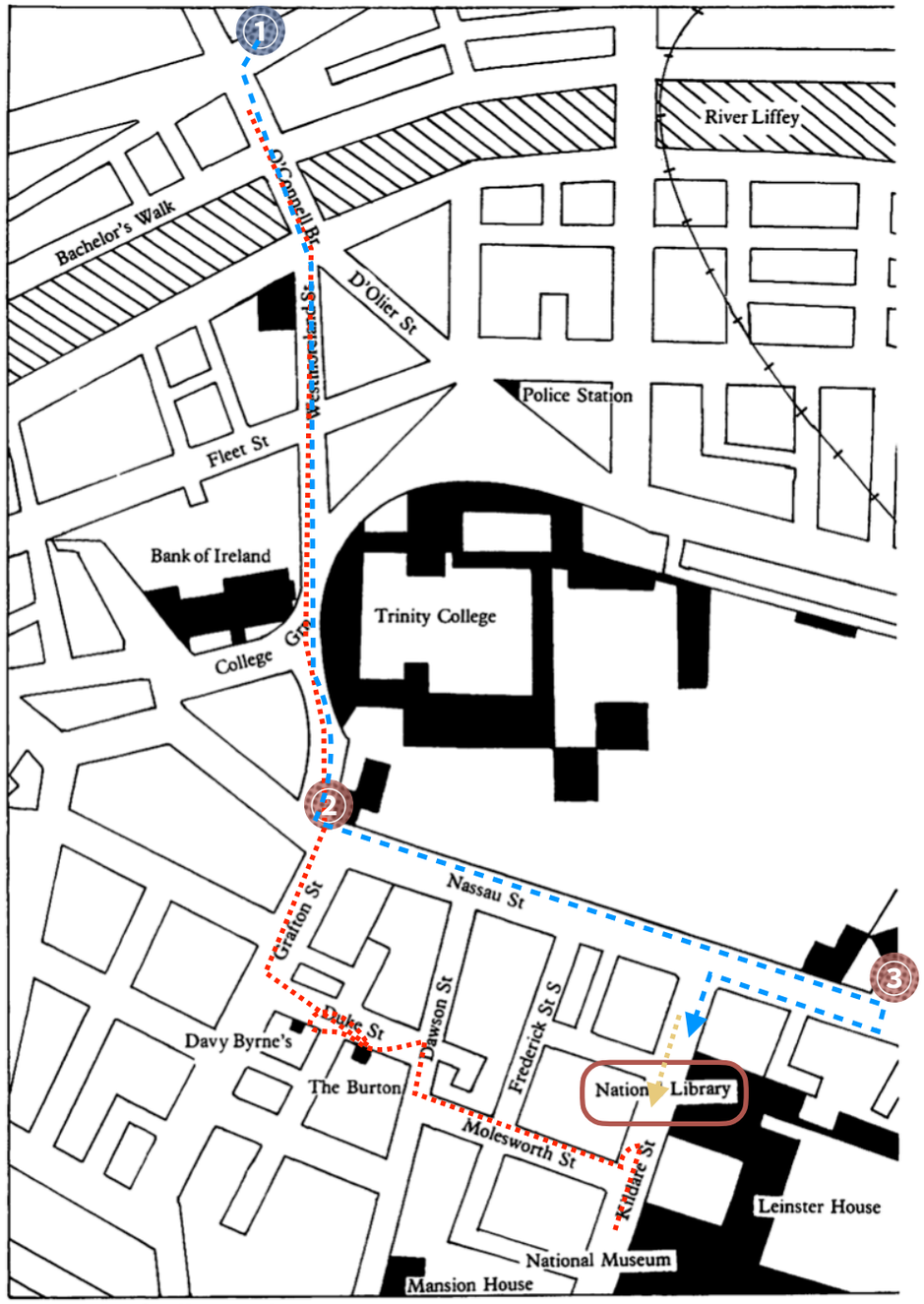
→ジョイスが意図をもって一文目にこれを置いた戦略を理解する。
→独特の傾向や癖をもった語り手であることの告知。
→先行する挿話を、つまり「外」を参照せよという合図。

第8挿話の終わりと第9挿話の始めの間で、何かが起こっている。

[9]

* Urbane, to comfort them, the quaker librarian purred:
—And we have, have we not, those priceless pages of *Wilhelm Meister*. A great poet on a great brother poet. A hesitating soul taking arms against a sea of troubles, torn by conflicting doubts, as one sees in real life.

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger



EPISODE 9. *Scylla and Charybdis*

❖第8挿話から第9挿話まで

①第7挿話でスティーヴンが一行と向かった酒場Mooney's（1 Abbey Street Lower ）。マリガンとヘインズと待ち合わせをしていた酒場シップはすぐ隣にある（5 Abbey Street Lower）

- "Probably he went tot eh Homestead office (22 Lincoln Place, near Bloom's bath) and was sent the further few hundred yard to the Library, where AE was to be found in the Librarian's office." (Hugh Kenner, Ulysses, p. 59; See also Norris, "The Stakes of Stephen's Gambit in "Scylla and Charybdis," *Joyce Studies Annal*, 2009, p.4)

②ブルームが自転車に乗ったAEを見かける。AEはこのまま国立図書館に行ったと見られる。バートン食堂で昼食を取ったあと、国立図書館に向かおうとするも、急にボイランが現われたため急いで方向転換し、国立博物館の門に入る。第9挿話のスティーヴンたちの文学談義中、ブルームは隣の国立博物館から、キーズの図案調べのために国立図書館にやってくる。

③この辺りに『アイリッシュ・ホームステッド』のオフィスがあった（22 Lincoln Place）。

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- Mockersによる「横」からの茶々

ムッシュ ー・ド・ラ・パリスは、スティーヴンが冷笑まじり言った。 死ぬ15分前には生きていた。（U-Y 9. 315）（Monsieur de la Palice [1470-1525], Stephen sneered, was alive fifteen minutes before his death. ；※当たり前のこと言う時の慣用表現）

……

長身のもつれ髭手織質素（ホームスパン）姿が陰から立ち上り、 それと連携する懐中時計の素顔を見せた。
―そろそろホームステッドへ行かなくては。（U-Y 9. 327）

……

―パイパーが！と、ベスト氏がパグパイプ声を発した。ハイパーが帰って来た?
ピーター・パイパーぴりぴりピクルスぴりひく食ってぴりひっく（U-Y 9. 328）

……

…刮目して待っているよ。
刮目して彼は円錐形の灯火 を覗き込む 。三つの顔が 、照らされて、光った。（U-Y 9. 328）

……

結構なベイコン。黴が生えちゃって。シェイクスピアはベイコンの若気の至り。暗号曲芸師（Cypherjugglers）たちが大道を行く。（U-Y 9. 333）

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- **Mockers**による「横」からの茶々

嘲笑う者の群れ（Brood of mockers）。フォティオス、偽マラキ、ヨーハン・モースト。（U-Y 9. 337）
（cf. Photius and the brood of mockers of whom Mulligan was one...”; U 1. 656-67）

……

―きみはあれが奇説にすぎないと思うのかな？　と、篤震の図書館長が問い掛ける。戯け者は本気で真面目になると決して真面目に受取ってもらえないからね。
戯け者の真面目さについての真面目なやり取りがはじまった。（U-Y 9. 339）-
―Do you think it is only a paradox? the quaker librarian was asking. The mocker is never taken seriously when he is most serious.
They talked seriously of mocker’s seriousness. (U 9. 542-44)

……

―ベッドが二つあったのは明らかでしょ、ベストのとセカンドベストのが、と、セカンドベスト・ベスト氏が見事に言った。（U-Y 9. 347）

……

―美の感覚はぼくらを迷わせるからね、ーと、哀愁美ベストが哀醜エグリントンに言った。（U-Y 9. 348）

……

いったい、なにを言いたいってんだ？
わかってる。黙ってろ。ひっこんでろ。おれにはもろもろの理由があるんだ。（U-Y 9.353）

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- **Mockers**による「横」からの茶々

・第９挿話のMockを行う語り手（？）の特徴

長身のもつれ髭手織質素（ホームスパン）姿が陰から立ち上り、 それと連携する懐中時計の素顔を見せた。

—そろそろホームステッドへ行かなくては。（U-Y 9. 327）
A tall figure in bearded homespun rose from shadow and unveiled its cooperative watch. I am afraid I am due at the Homestead.”

※Horace Plunkettが設立した “Cooperative movement”を推進したIrish Agricultural Organisation Societyは後にIHのオフィスを収容。ブラヴァツキー夫人の*Isis Unveiled* (1877) のアリュージョン。

（1）直前／直後において特定の言葉を反復したり、ひねりのないpunを行ったり、当人に属する事柄・関連事項を記述のなかの語句として引き寄せて、発言の内容や行動を茶化す“mocker”。

（2）この挿話以外のページで使われている語句に知悉している。上記の記述は、先行する挿話の “His [Bloom’s] eyes followed the high figure in homespun, beard and bicycle, a listening woman at his side.” (U 8. 534-44)を参照せよ、という言外の指示を働かせている。

（3）単なる語り手ではなく、その陰に隠れているような、気まぐれに姿を現してはいつのまにか消えてしまう奇妙な存在がいる？

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- Arranger の登場

David Hayman, Ulysses: *The Mechanics of Meaning* (U of Wisconsin P, 1970, 1982)で提唱された「謎の操作的な力」に関する説

> “a figure or a presence that can be identified neither with the author nor with his narrators, but that exercises an increasing degree of overt control over increasingly challenging materials” (Hayman, 84)

> “… in the initial action of Ulysses. . . . It is also behind . . . the style shifts that mark each of the early chapters. . . . Furthermore, the arranger controls the suppression of information and action. . . . Indeed, just about any intrusive or arbitrary phenomenon should be attributed to the arranging persona” (Hayman, 125)

・著者や語り手とは同一視できず、挿話が進むたびに難解になる素材に関して、ますますあからさまに操作を行うような存在。

・物語を読む読者に対して、特定の情報を出さないでおいたり、行動を明示させないような「操作」を行う。語りのなかに、ぐいぐいと割り込んでくるような質や恣意性を感じたら、**そこには「アレンジャー」がいるかもしれない**。

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- 「**アレンジャー**」 の登場

  “The arranging presence (David Hayman, the first critic to dwell on its intrusions , has even suggested that we say “the Arranger”) enjoys a seemingly total recall for exact forms of words used hundreds of pages earlier, a recall which implies not an operation of memory but access such as ours to a printed book, in which pages can be turned to and fro. Like an author’s ideal reader, this Arranger keeps remembering, savouring the choice verbal bits.” (Hugh Kenner *Ulysses*, rev, ed., John Hopkins, UP, 1980)

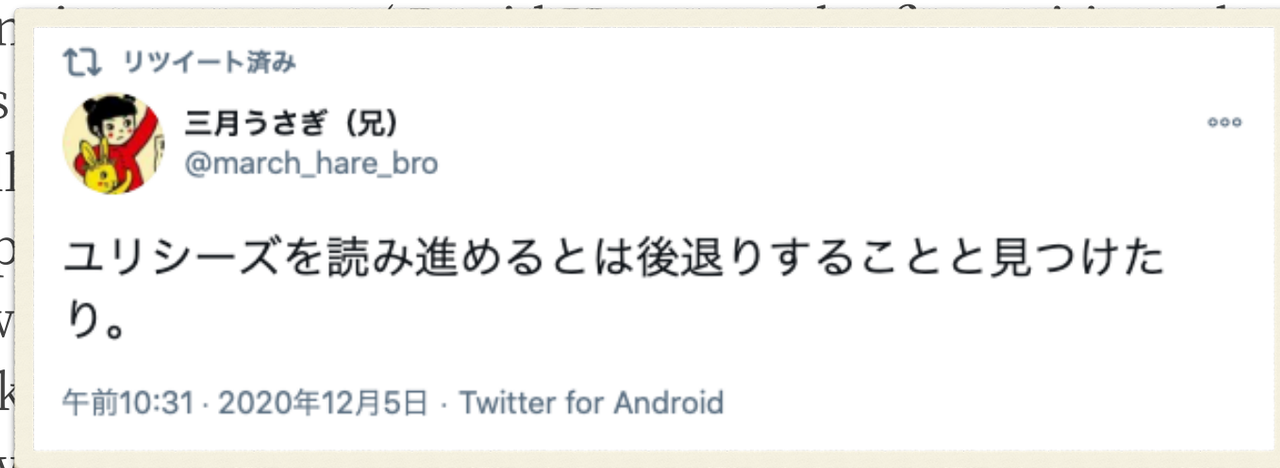
・何百ページも前の言葉を「正確に」記憶している。前に、あるいは後ろにページを繰ることでアクセスできる「印刷された本」の上の情報としてそれらの言葉を記憶し、時に応じて、読者に喚起を行ってくる。

→第９挿話には、嘲笑的でいたずら好きな存在が暗躍しており、ところどころで顔を出している。cypherjugglersやmockersである図書館内の人物たちに要素を凝縮した要素をarrangerは有する。※arrangerに関しては特に、John Somer, “The Self-Reflexive Arranger in the Initial Style of Joyce’s Ulysses,” *JJQ,* Vol. 31, No. 2 (Winter, 1994), pp. 65-79が参考になる。

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

- 「**アレンジャー**」 の登場

“The arran ll on its
intrusions oys a seemingly
total recall rlier, a recall
which imp urs to a printed
book, in w s ideal reader, this
Arranger k ” (Hugh Kenner
Ulysses, rev, ed., John Hopkins, U, 1980)



・何百ページも前の言葉を「正確に」記憶している。前に、あるいは後ろにページを繰ることでアクセスできる「印刷された本」の上の情報としてそれらの言葉を記憶し、時に応じて、読者に喚起を行ってくる。

→第９挿話には、嘲笑的でいたずら好きな存在が暗躍しており、ところどころで顔を出している。cypherjugglersやmockersである図書館内の人物たちに要素を凝縮した要素をarrangerは有する。※arrangerに関しては特に、John Somer, “The Self-Reflexive Arranger in the Initial Style of Joyce’s Ulysses,” *JJQ,* Vol. 31, No. 2 (Winter, 1994), pp. 65-79が参考になる。

【第９挿話の語り】Cypherjugglers, Mockers, and the Arranger

第9挿話を読むときには、「裏」に広がる世界と「外」へ向かう語り、「横」からの茶々に着目する。

① 知的な世界の「裏」には、マテリアルな世界がある。シェイクスピア論を唱えているスティーヴンの靴下には穴が空いている。（「ステパノス、おれの冠。おれの剣。やつの靴がおれの足の格好をいびつにしそうだ。穴だらけのおれの靴下。」（U-Y 9. 357）

② 第９挿話は先行する挿話と、つまり「外」と繋がっており、特に断片的であったトピックの回収ポイントになる。先行挿話と繋がる「われ発見せり！」（U-Y 9. 361）に至る「発見の入口」（U-Y 9. 325）が各所に空いている。

③ 人物たちが語る言葉や理屈は、もはや堅固な土壌の上には置かれない。語り手の「横」に隠れている「アレンジャー」の操作に惑わされないよう注意。「言葉が事実を追い抜いてしまう」可能性がある（川口喬一『ユリシーズ演義』研究者出版、p. 171）

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

次回：第10回読書会について

次回の第10回読書会（第10挿話：さまよえる岩）は2月21日（日）にオンラインで実施します。具体的な日程と予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。後ほどアンケートフォームを別途送付しますので、今回のご感想・改善点について教えていただけると幸いです。

本日はご来場いただき、ありがとうございました。

（南谷・小林・平繁）

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies